平安文学における「極楽浄土」の見立て表現
-『源氏物語』を中心に-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学大学院 公開日: 2022-09-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小滝, 真弓 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/22687

文学研究論集第57号　'22・9
研究論集委員会　受付日　二〇二二年四月十四日
承認日　二〇二二年五月三十日

平安文学における「極楽浄土」の見立て表現
――『源氏物語』を中心に――

Expression of "Sukhavati" in Heian Period Literacture
――Focusing on The Tale of Genji――

博士後期課程　日本文学専攻　二〇一六年度入学
小　滝　真　弓
KOTAKI Mayumi

【論文要旨】
本稿では現世を浄土に擬えた表現を取り上げ、『源氏物語』を中心に、その浄土観の内実について論じた。とりわけ六条院王権の栄華を象徴的に言い表した、『源氏物語』初音巻の「生ける仏の御国」という表現の特異性に着目する。これまで平安文学における浄土の見立ては、享楽的な唯美表現と見なされ、ほとんど論じられてこなかった。そこで本論では、『源氏物語』の浄土観が四季の巡りを重視し、自然美を賞美する和歌的な発想と融合することにより、独自の儚さや無常観を帯びていることを明らかにした。
『源氏物語』成立以前の作品には、転身や栄達を印象付ける浄土の見立て表現が散見されるが、『源氏物語』もまた、そのような文学史上の流れに位置づけられる。しかし『源氏物語』には、極楽浄土の輝きが照らし出す、人の生の苦患に目を向けるという特質がある。浄土を物語に呼び込むことで、より陰影を増していく『源氏物語』の、表現世界の深まりについて考察した。

【キーワード】極楽浄土、見立て、源氏物語、初音巻、四方四季

一、はじめに

『源氏物語』初音巻は、前年の秋に落成した六条院が初めて迎える新春の情景から始まる。

年たちかへる朝の空のけしき、なごりなく曇らぬうららけさには、数ならぬ垣根の内だに、雪間の草若やかに色づきはじめ、いつしかとけしきだつ霞に木の芽もうちけぶり、おのづから人の心もものびらかにぞ見ゆるかし。ましていとど玉を敷ける御前は、庭よりはじめ見どころ多く、磨きましたまへる御方々のありさま、まねびたてむも言の葉足るまじくなむ。春の殿の御前、とりわきて、梅の

香も御簾の内の匂ひに吹き紛ひて、生ける仏の御国とおぼゆ。（初音巻／一四三頁）

春の兆しに世間の人々が心を浮き立たせる様子から、抜きんでた栄華を極める六条院の有様へ、その中でも「とりわきて」素晴らしい紫の上の春の町へと、より非日常的な空間へと視点は移り変わり、太政大臣となった源氏の栄華を観取させる。注目したいのは、ここで紫の上が住まう六条院春の町が、広大な世界の中心に現出した、「生ける仏の御国」という極楽の如き空間として描写されている点だ。このように三段に書き分ける初音巻冒頭の構成について、『岷江入楚』は「九品ノ三輩ヲフクメルナルヘシ」と、『無量寿経』に説かれている三輩往生[1]の思想を指摘し、紫の上が住まう春の町こそ、九品の最上位である上品上生を遂げたに等しい、理想的な仏国土として描かれていると述べている。現行の研究においても、初音巻冒頭の記述は世俗を超越した六条院王権の無比の栄華を象徴する表現と捉えられており[2]、一際瑞気を帯びた存在として語られる春の町の特異性が注目されよう。

『源氏物語』が成立した平安中期は、末法思想と共に浄土信仰が急激に広まった時代であり、当時記された願文や仏教説話集、王朝貴族による持仏堂や阿弥陀堂などの建築、浄土変相図といった諸史料から、隆盛を極めた信仰の様相が窺われる。それゆえ『源氏物語』の研究においても、仏教思想との関わりが早くから指摘されてきた。物語表現に見える仏教故事や仏典引用について詳解した高木宗監氏[3]や西田禎元氏[4]の論考はよく知られるところだが、天台浄土思想や天台教学が物語に与えた影響について考察した論[5]や、女性と仏教の関係性について言及した論[6]など、多角的な視点から『源氏物語』の仏教受容の内実が解き明かされている。その一方で、『源氏物語』における見立て表現としての極楽については、教説引用や仏事法会、出家等の問題と比べ、殆ど着目されてこなかったように思われる。その理由の一つとして挙げられるのが、『源氏物語』に見える極楽に関する表現の多くが、壮麗な美しさを前にした時の感動を表す、言わば表現上の潤色に過ぎないと考えられてきたことだ。例えば『源氏物語』に見える仏教思想を整理した重松信弘氏[7]は、「単なる舞楽の詠の美声や、琴の弾奏の楽しさからも、極楽のことが思われている」がゆえに、『源氏物語』の極楽表現は、「仏教の思想・信仰とは直接的に関係なく、唯美的」なものに過ぎないと指摘している。

しかしこうした唯美的な叙述の有無を論拠に、極楽浄土の表現を現世的な享楽美の象徴とすることは果たして妥当であろうか。元来「極楽浄土」とは理想郷であると同時に、「この世（現世・憂世）」に対置される異界の表象でもあった。浄土の如き情景を「現視」し、そこに遥かなる理想郷を「幻視」する時、自ずとこの世（現世・憂世）に生きる者の在り方が逆照射される。それゆえ極楽浄土が眼前に立ち現れた場面を、物語の内実と絡めて読み解く視座が重要となるのである。上記を踏まえたうえで、本稿では浄土観の変遷と、平安文学における極楽浄土の見立て表現を概観しつつ、『源氏物語』に記された「極楽浄土」の、表現的な深まりについて考察していきたい。

二、浄土への対峙

平安文学における極楽浄土の見立て表現を取り上げるうえで、まず押さえておきたいのが、同時代の「浄土」に対する精神的距離の縮まりと、それに伴う表現の変化である。

文献上で初めて「極楽浄土」の存在に触れたのは、『日本書紀』推古天皇二十九年（六二一）二月条に見える、「因りて上宮太子に浄土に遇ひたてまつりて、共に衆生を化さむ」（巻二十二／五七九頁）という、高麗の僧慧慈[8]の誓願であった。ここに見えるように、上代仏教における宗教意識は、あくまで国家という集団的な位相に留まっており、浄土に関する表現もまた、仏法の外護者としてのものが中心を為していた[9]。律令制の崩壊を機に、国家の安寧を祈る宗教（国家仏教）から、個人を救済する宗教へと仏教信仰は転換するが、上代には見え無い極楽浄土の見立て表現が、平安文学では三十例にまで増えている理由の一端は、こうした信仰形態の変化に由来していよう。

源信の『往生要集』（九八五年成立）以降、貴族社会を中心に浄土教の教えは広く享受され、人々は理想世界たる浄土への往生を希求した。しかし往生を遂げるまでの階梯は険しく、『往生要集』では臨終に際して抱く、僅かな心の乱れすらも往生の妨げとしている。だからこそ、現世を「仮の世」「憂世」と思い定めた者にとって極楽往生は切実な問題であり、仏教説話集や往生伝には、異相往生者の事跡が記されたのである。例えば日本最古の仏教説話集である『日本霊異記』（景戒／平安初期成立）上巻第二十二には、求法のため唐に渡り、日本各地に仏法を広めた道照法師が、死に際して光を放つ奇瑞を示し、その光が西を指して飛び行くと同時に息絶えたとする往生譚が見える。浄土信仰の高まりを示す代表的な資料として、『日本往生極楽記』をはじめとする六往生伝[10]が挙げられるが、文人貴族の手による古記録にも、夢告げなどを通して往生を悟る記事が存在した[11]。『小右記』寛仁三年（一〇一九）十二月五日条では、「左大将云、今暁夢慶闍梨詣極楽之想、子日可入滅者、明日欤、其夢躰極貴、大躰、色丶雲内天人音唱、空中有船、丶中載棺、是慶闍梨迎極楽云丶」と、藤原教通が見たという、病床に就いている慶祚阿闍梨が往生を遂げる予知夢が記されている。死を目前に控えた者の前に奇瑞が起こり、あるいは生前結縁した人々の夢に現れ死後の生処を示すという、往生伝や古記録の夢記事に見える話型は、明らかに源信が説いた浄土教の臨終行儀の影響を受けたものだ[12]。こうした数々の往生譚は、彼岸の聖なる世界を透かし見ることで、死後の生処を現世の縁者に知らせると共に、往生を果たした者の行業[13]や、臨終行儀[14]に基づく理想的な終焉の形を定位するという、二重の構造を有している。

さらに後代の例ではあるが、『後拾遺和歌集』巻十・哀傷には、天延二年（九七四）九月に疱瘡にかかり薨じた藤原義孝が、賀縁法師の夢に現れて詠んだとされる歌が見える[15]。

時雨とは千種の花ぞ散りまがふなに故郷の袖ぬらすらん

この歌、義孝かくれ侍てのち、十月許に賀縁法師の夢に、心地よげにて笙を吹くと見るほどに、口をたゞ鳴らすになん侍りける。母のかくばかり恋ふるを、心地よげにてはいかにと言ひ侍

りければ、立つを引き留めて、かくよめるとなん言ひ伝へたる
（五九九番）

極楽浄土では様々な花が散り乱れることを時雨と言うのに、どうして現世では私の死を悲しみ、袖を濡らすのかといった歌意だ。このような往生を示唆する夢は、「夢」という回路を通じて死後の生処を知らせんと誓った、二十五三昧会の往生人と結縁衆の関係を想起させる。

とはいえ、夢見られた往生人の奇瑞や来迎は、この世に生きる者にとっては浄土を垣間見させる束の間の慰めに過ぎなかった。往生伝が奇瑞と夢告を重視している点に着目した西口順子氏[16]は、源信の説いた臨終行儀の過酷さや凄絶さに、救済への不安に慄く「浄土願生者の苦悩」を読み取り、美的観想を契機とした享楽的信仰として平安貴族の浄土信仰を解することの危うさについて言及している。西口氏の見解と重なるところであるが、救済への祈りと不安が奥底に揺らいでいるからこそ、大法会や仏教芸術が織り成す浄土の世界がより美しく輝き、切実さを帯びて人々の心を捉えたのであろう。往生者よりも、苦界や地獄に堕ちた死霊の方が、平安貴族たちにとって想起しやすい存在であったとする上野勝之氏[17]の指摘を踏まえても、往生者がごく限られた存在であり、その後ろに中有を彷徨い続ける数多くの亡魂への恐れがあったことが窺える。平安文学における極楽浄土の見立て表現が、このような平安期の浄土観や他界認識と密接に結びついているのは言うまでもない。だからこそ、現実の情景に重ねて感得された浄土の美は、この世に生きる者の苦患や、変転していく運命を照らし出す契機ともなり得たのである。

三、極楽浄土に見立てられる邸

それでは浄土の美とは、具体的にどういった情景を指すのであろうか。本稿では極楽浄土を中心に取り上げるが、例えば『阿弥陀経』の注釈書である『阿弥陀経通賛疏』巻中（唐代／窺基）では、「第一樹飾四珍。第二池嚴衆寶。第三空盈天樂。第四地布黄金。第五華雨長天。第六人遊諸國。第七鳥吟妙法。第八風吹樂音」（三七巻／三三八頁下段）と、浄土を構成する八つの要素を挙げている。こうした分類を踏まえつつ、あえて簡潔に述べれば、極楽浄土とは四季が無く温暖な空気の中、天上から花が降り、妙音が奏でられ、周囲を囲繞する七宝により荘厳された世界と言えよう。こうした浄土観は極楽浄土に始まるものではなく、インドの古代神話など、伝統的な他界観が「寄せ集め的に組み上げられ」ることによって、極楽浄土の「異界性」が打ち出されたと先学により指摘されている[18]。そのため、平安文学における浄土の見立て表現とは、仏典に集積された異界のイメージの、断片的転用だという見方をすることもできよう。

だが漢訳仏典の表現を直接取り込むことが可能な漢詩文とは異なり、和歌や仮名文学が浄土の美を題材とするには、表現手法上に階梯が存在した。現に王朝和歌の世界では、「極楽浄土」や「仏の国」など、浄土を直接的な表現で歌に詠み込んだ例は限られている。浄土教への関心を詠んだ釈教歌が勅撰集に現れるのは『拾遺和歌集』以降だが、四季の循環に心を寄せ、自然の景物を歌うことに主眼が置かれていた王朝和歌の世界において、浄土の美が直接的題材とならなかったのは、こうした観

念的な位相差が影響を及ぼしたためだ[19]。これは物語や日記といった仮名文学、特に『源氏物語』における極楽浄土の見立てを語る上で見逃せない側面である。

このように考えると、法会の場でもない邸を浄土に見立てた、初音巻の特異性が浮かび上がってこよう。こうした例の先蹤として、『宇津保物語』で帝の落胤である孫・源涼のために神南備種松が造営した吹上宮の存在が挙げられる。吹上上巻では、四方四季の邸である吹上宮が、浄土を飾る「金銀、瑠璃、車渠、瑪瑙」[20]によって造られ、四方に「梅檀、優曇咲かず、孔雀、鸚鵡鳴かぬばかり」の庭が巡らされた空間として語られていた。

かの君、『一日二日ばかり、馬どもかい休めて参上れ』などとめたまひしかば、とまりて見たまへしに、いはゆる西方浄土に生まれたるやうになむ。四面八町の所を、金銀、瑠璃、車渠、瑪瑙して造り磨き、巡りには、梅檀、優曇咲かず、孔雀、鸚鵡鳴かぬばかりにてなむ住みはべりたぶ。（吹上上巻／四三一～四三三頁）

吹上宮に存在しないものは、極楽の岸に咲く梅檀と、三千年に一度咲くという優曇華、浄土六鳥に数えられる孔雀と鸚鵡だけだと述べられている。「いはゆる西方浄土に生まれたるやうになむ」という言によって形象化されている通り、それ以外のあらゆる種類の花が咲き乱れ鳥達が集う、極楽浄土に擬された理想境がこの邸であった[21]。重要なのは、吹上宮が仏典に記された極楽浄土の形容そのままに、極楽を引き写した空間として記されている点だ。

冒頭に引いた初音巻の記述に見える通り、吹上宮と同じく四方四季の館[22]である『源氏物語』の六条院にも、極楽浄土の見立て表現は用いられている。しかし『源氏物語』では、『宇津保物語』のそれとは異なり、新春を迎えてほころぶ自然美の中、「梅の香」と「御簾の内の匂ひ」が混ざり合い現出した空間として描かれている。吹上宮のような漢訳仏典に由来する「金銀、瑠璃、車渠、瑪瑙」といった具体的な宝石の呼称は姿を消し、それに代わって用いられているのが、「玉を敷ける御前」という表現だ。後代の例ではあるが、このような発想は『風雅和歌集』巻十八・釈教歌に収められている藤原俊成の次の歌にも通じている。

極楽六時賛を歌によみけるに、晨朝を　　皇太后宮大夫俊成

朝まだきつゆけき花ををるほどは玉しく庭にたまぞちりける

（二〇九二番／皇太后宮大夫俊成）

右は源信作の極楽六時讃の中から、一日の始まりである晨朝に、往生者が阿弥陀仏を供養する場面を詠んだものだ。『長秋詠藻』下巻に収められている同歌（四三六番）の詞書には、「黄金瑠璃の庭に出でて人人共に花を採る」と、極楽六時讃の一節が引用されている。俊成歌では、黄金や瑠璃といった荘厳華麗な表現に代え、「玉しく庭にたまぞちりける」という和らいだ表現となっており、露を含んだ花が咲く、日本の自然観と融和する形へと極楽の情景が変化していることが分かる。右の俊成歌が初音巻の表現を意識している可能性も否めないが、いずれにしろ、『源氏物語』の見立て表現が、仏典の引き写しではなく、季節の移ろいに美を見出す和歌的な発想を取り入れていることは明らかだ。

留意しておきたいのは、こうした和歌における季節美が、その背景に移り変わる儚さへの無常観をも含み込んでいたことだ。それは例えば、

『古今和歌集』巻二・春歌下の「たれこめて春のゆくへも知らぬまに待ちし桜も移ろひにけり」（八〇番／藤原因果朝臣）や、同巻五・秋歌下の「秋の菊にほふ限りはかざしてむ花よりさきと知らぬわが身を」（二七六番／紀貫之）という歌に表れている。『古今和歌集』をはじめ、自然の景物を通して現世の無常や儚さに目を向ける和歌の思想は、『源氏物語』の極楽浄土の見立て表現にも通底しているように思われる。

もっとも、六条院が迎えた栄華の初春を語る初音巻に、無常や儚さを見ることは不適切とする見方もあろう。しかし初音巻冒頭の「生ける仏の御国」という極楽の見立てもまた、そのような苦の世界と無縁ではなかった[23]。それをはっきりと示唆しているのが、臨時客で賑わう春の町の様子を他所に聞く、女君たちの憂悶を記した次の場面だ。

かくののしる馬車の音をも、物隔てて聞きたまふ御方々は、蓮の中の世界にまだ開けざらむ心地もかくやと心やましげなり。まして東の院に離れたまへる御方々は、年月にそへて、つれづれの数のみまされど、世のうき目見えぬ山路に思ひなずらへて、つれなき人の御心をば、何とかは見たてまつりとがめん。（初音巻／一五二～一五三頁）

ここに言う「蓮の中の世界にまだ開けざらむ心地」とは、『観無量寿経』に記された九品往生の思想を下敷きにしている。上品上生の衆生が来迎に導かれ、そのまま極楽に生じるのに対して、上品中生以下の衆生は浄土の宝池に浮かぶ蓮華の蕾の中に坐し、開花を待つとされた。上品中生は一夜、上品下生は一昼夜で開花を迎えるが、中品下品と位が下るに従い開花には長い年月を要し、下品下生に至っては十二大劫という途方もない年月を蓮華の中で待たねばならなかった。初音巻では、寵愛を一身に受け「生ける仏の御国」に住まう紫の上とは対照的に、同じ六条院に住みながらも、盛儀から隔てられ日陰に置かれた女君たちが抱く、極楽を前にして蓮華の花弁に隔てられた者の、もどかしい心情へと目を向けているのである。

現世の情景を浄土に見立てることによって生じた明暗の反照は、続く胡蝶巻にも当てはまる。胡蝶巻では、紫の上方の船楽と、秋好中宮方の季御読経という、二つの盛儀が語られている。特に季御読経の場面では、紫の上から差し向けられた舞童による供花が、極楽の如き空間を形作っている点に注意したい。

春の上の御心ざしに、仏に花奉らせたまふ。鳥、蝶にさうぞき分けたる童べ八人、容貌などことにととのへさせたまひて、鳥には、銀の花瓶に桜をさし、蝶は、黄金の瓶に山吹を、同じき花の房いかめしう、世になきにほひを尽くさせたまへり。南の御前の山際より漕ぎ出でて、御前に出づるほど、風吹きて、瓶の桜すこしうち散り紛ふ。（中略）鳥の楽はなやかに聞きわたされて、池の水鳥もそこはかとなく囀りわたるに、急になりはつるほど、飽かずおもしろし。蝶はまして、はかなきさまに飛びたちて、山吹の籬のもとに、咲きこぼれたる花の蔭に舞ひいる。（胡蝶巻／一七一頁～一七三頁）

「瓶の桜すこしうち散り紛ふ」という表現からも分かる通り、「生ける仏の御国」と初音巻で賞賛された初春から季節は進み、物語は初夏を迎えつつあった。先行研究ではあまり重視されていないが、右の場面で風を受け「うち散り紛ふ」桜は、『無量寿経』巻上の次の浄土観を踏まえ

た描写と考えられる。

又風吹散レ華遍二満佛土一。（中略）柔軟光澤馨香芬烈。足履二其上一陷下四寸。隨二擧レ足已一還復如故。華用已訖地輒開裂。以レ次化没清浄無レ遺。隨二其時節一風吹散レ華。如レ是六反。（十二巻／二七二頁上段）

『無量寿経』によれば、極楽浄土では風が華を散らして仏土を満たし、その華は柔らかく光り輝いて、馥郁たる薫りを放っているという。足で踏めば四寸沈み、足を上げれば元に戻り、散った華が汚れる前に地面が開いて落花を消し、そしてまた風が華を吹き散らす。それが一日に六度繰り返されるとしている。船に乗り「生ける仏の御国」から現れた舞童の持つ桜が、折しも吹いた風によって散らされる様は、見る者に『無量寿経』が語る、無限に散り咲く花で満たされた極楽浄土の情景を想起させたに違いない。

しかし胡蝶巻では、紫の上から贈られた供花と舞楽を、「はかなきさま」に飛びたった胡蝶の舞童たちが、「山吹の籬のもとに、咲きこぼれたる花の蔭に舞ひいる」という描写で終えている。常春を誇る「生ける仏の御国」の永続性を反芻しながらも、物語はやがて移り変わる四季の巡りに目を向けずにはいられない。初夏の兆しである山吹の花の蔭へと胡蝶の舞童たちが舞い入った時、「生ける仏の御国」もまた、飛花落葉と無縁ではない、危うい均衡の上に成り立つ世界であることが示唆されるのである。それはあたかも、表層的には栄華と権勢を保ちながらも、内実的には空虚な憂いを増していく、今後の六条院世界の行く末を予言するかのようだ。源氏の人生の陰りが、「山吹」に表象される玉鬘への恋慕と挫折から始まることを鑑みても、『源氏物語』が不変の世界である浄土を呼び込むことで、むしろ物語の奥底に変転の揺らぎを潜ませていることが了解されよう[24]。

後述するように、『源氏物語』では極楽浄土を感得すると同時に、現世の無常や儚さに目を向ける傾向がある。こうした『源氏物語』の描写は、仏典に記された荘厳華麗な浄土の形容に留まらず、月を見て仏を感じ、移ろい散る花に無常を感じる、和歌の感性を融合させたからこそ切り開かれた地平と言える。

四、平安文学における極楽浄土の見立て表現

ここで『源氏物語』以外の平安文学に見える浄土の見立てに目を向けよう。かつて日本思想史家の和辻哲郎氏[25]は、宗教と芸術を対立的に捉える現代の認識を批判し、舞楽・音楽を用いた法会等の「芸術的法悦」を通して絶対境への導きを得た、王朝貴族の仏教信仰のあり方を再評価した。和辻氏が述べる通り、平安貴族の栄華無くして、美を端緒とした信仰である「芸術的法悦」が生じることは無かったであろう[26]。

だが果たして、平安文学に見える「極楽」「浄土」「仏の国」といった表現は、美の極致として人々の心を打ち、信仰へと誘っているのであろうか。そこで本章では、まず『源氏物語』以前の作品に目を向けたうえで、極楽浄土の見立てを物語に組み込むことで生じた作品世界の奥ゆきについて、初音巻を中心に論じていく。その際に重視したいのが、「栄華」の象徴としての極楽浄土の見立て表現だ。

管見の限りでは、平安文学において現世の情景を極楽浄土に見立てた

例は三十例あり、八例は後述する『源氏物語』のものである。残る八作品二二例の中で、実に十例を『栄花物語』が占めている。その他は、『宇津保物語』三例、『落窪物語』二例、『枕草子』一例、『浜松中納言物語』一例、『夜の寝覚』一例、『狭衣物語』二例、『大鏡』二例が確認できる。『源氏物語』以前の例として数えられるのは、『宇津保物語』から『枕草子』までの六例だ。紙幅の都合上、『源氏物語』より後に成立した作品に言及できないことが悔やまれるが、この点については別稿にて改めて考察を加えていきたい。

まず左に挙げたのは、『宇津保物語』の三例だ。

①吹上宮の形容

いはゆる西方浄土に生まれたるやうになむ。（吹上上巻／四三三頁）

②相撲の節会における勝ち方の遊び

天下に西方浄土の遊びも、かくぞあらむ。（内侍のかみ巻／二三三～二三四頁）

③藤英の出世に対する比喩

「生きながら人の身変はるものなりけり。この世にも浄土はありけり」（国譲下巻／三四九頁）

この三例のうち、実景を浄土に見立て「現視」しているのは、前章で触れた①のみだ。②は帝の御前での弾琴を避けるため、母の興味を引いて代参させようとした仲忠の台詞で、架空の勝ち方の遊びである。③は正頼に見出され、貧窮学生から右大弁まで望外の出世を遂げた藤英の転身を往生に見立てた表現だ。藤英の出世ぶりを極楽往生に見立てることで、若くして親兄弟を失い、苦学生として窮迫していた藤英の過去と、権門の恩顧を得て出世を果たした現在の栄華とを対比的に捉えている。浄土が映し出す明と暗を重視する本稿の立場からすれば、③の栄達・転身の比喩としての「浄土」の存在は見過ごせない。「極楽浄土」を引き合いに出すことで過去と現在の境遇の変転を印象付ける手法は、『宇津保物語』の当該例に限った話ではなく、次の『落窪物語』の二例（④⑤）にも当てはまる。とりわけ『落窪物語』では、男君（道頼）の愛情のもとで安寧を得る、女君（落窪の君）の転身を印象付ける場面で、極楽浄土の見立てが用いられている点に特徴がある。

④賀茂祭見物のために設けられた豪奢な桟敷の様子

衛門、少納言、〈一仏浄土に生れたるにやあらむ〉とおぼゆ。（巻之二／一九六頁）

⑤再婚する四の君に随行し、筑紫に下ることを嫌がる女房達の心情

〈（前略）よろづのこと、浄土の心地するわが殿をうち捨ててまからむこそものぐるほしけれ〉と、下仕まで思ひて、一人も下らず。（巻之四／三二八頁）

④は懐妊していた落窪の君が、道頼の母（大将の北の方）と初めて対面を果たし、正妻格として認められた重要な場面だ。「一仏浄土」に見立てられた賀茂祭見物の桟敷は、継母に虐げられていた落窪の君の過去と、道頼の正妻として大将の北の方の女房達から丁重に扱われる現在とを対比的に捉えなおす場となっている。さらに⑤では、「浄土の心地するわが殿」と、左大臣邸から遣わされた女房達の、筑紫下向を嫌がる心情が記されている。左大臣道頼の妻として栄華を極める落窪の君と、大宰権師の妻となり京を離れる、継母の実娘四の君の落魄した現状とが対

照的に示される構図だ。③④⑤の例から、過去から現在に至るまでの運命の変転を浮き彫りにし、明と暗の対比を鮮やかに印象付ける「極楽浄土」の在り方が見えてこよう。

こうしてみると、『枕草子』第二六〇段に見える、「生きての仏の国」という見立て表現もまた、美的感興に留まらない意味合いを有しているように思われる。第二六〇段は『枕草子』で最も長大な章段だが、ここで語られた道隆主催の法興院一切経供養は、中関白家の在りし日の栄耀栄華を象徴する法会として、日記中に位置づけられている。

⑥正暦五年（九九四）二月二十日、藤原道隆による法興院一切経供養（積善寺供養）の様子

高麗、唐土の楽して、獅子、狛犬をどり舞ひ、乱声の音、鼓の声に、ものもおぼえず。こは生きての仏の国などに来にけるにやあらむと、空にひびきあがるやうにおぼゆ。（第二六〇段／四〇九～四一〇頁）

『百錬抄』第四・一條天皇正暦五年（九九四）条が、「二月廿日。關白供二養積善寺一。准御齋會」と記している通り、この一切経供養は、道隆個人の御願に基づく供養会でありながら、国家的仏事である御齋会を准える形で催された特別なものであった。「こは生きての仏の国などに来にけるにやあらむと、空にひびきあがるやうにおぼゆ」という表現の根底には、中宮の行啓を仰いで大法会を催す中関白家の栄華に対する讃美と、今を時めく中宮定子の女房としての自負が込められている。

その一方で、わずか一年後の長徳元年（九九五）に道隆が死去し、その翌年（九九六）に起こった政変が決定打となり、中関白家が没落した現実を忘れてはなるまい。『枕草子』が主家を襲った悲劇を語らぬ作品であることはよく知られているが、道隆存命時だからこそ成し得た大法会に、「生きての仏の国」と浄土を重ね見ることで、意図せずしてその後に待ち受ける中関白家の苛酷な運命が浮かび上がってくるのである。

思うに、仏国土が纏う輝きを介して、人間の流転する命運を照らし出した前代の作品の特質を、『源氏物語』も汲んでいるのではないだろうか。それは源氏の栄華の初春を語る初音巻において、須磨流謫の記憶が呼び起こされている点からも窺える。

（源氏）うす氷とけぬる池の鏡には世にたぐひなきかげぞならべる
げにめでたき御あはひどもなり。
（紫の上）くもりなき池の鏡によろづ世をすむべきかげぞしるく見えける
何ごとにつけても、末遠き御契りを、あらまほしく聞こえかはしたまふ。（初音巻／一四五頁）

右の源氏と紫の上の贈答歌は、「池の鏡」に影を並べる夫婦二人の深い契りを、六条院の美景に寄せて寿いだものだ。王朝文学において、鏡は男女の情愛と結びついており、鏡に連れ添う二人の影が宿ることで愛情の証左とし、その愛の持続を祈るという思想があった[27]。当該歌で詠まれている「鏡」とは、直前に中将の君が新春の餅鏡に事寄せ、主人夫婦を祝して述べた、「かねてぞ見ゆるなどこそ、鏡の影にも語らひはべりつれ。私の祈りは何ばかりのことをか」（初音巻／一四四頁）という言を踏まえている[28]。中将の君の台詞に見える「鏡の影」は、須磨流謫を前にした源氏と紫の上の贈答歌にも用いられており、別れを前にしてなお鏡を介して添い遂げようと誓った二人の紐帯を読む者に想起さ

せる。

（源氏）身はかくてさすらへぬとも君があたり去らぬ鏡のかけは離れじ

と聞こえたまへば、

（紫の上）別れても影だにとまるものならば鏡を見てもなぐさめてまし

（須磨巻／一七三頁）

須磨への下向は、桐壺院崩御を機に凋落の一途を辿った源氏の政治生命と、冤罪を被り流謫の身となった不条理な運命の象徴であった。初音巻で再び持ち出された「鏡の影」は、池の鏡に並び映る紫の上と源氏の理想的な夫婦像を強調すると共に、苦難に満ちた過去の記憶を呼び起こす。初音巻の始まりを告げる「生ける仏の御国」という表現は、太政大臣となるまでに源氏が歩んできた、逃れ得ぬ過去の宿世を相対化している。

さらに初音巻では、極楽浄土に見立てることによる明と暗の反照が、主人公たる源氏に留まることなく、入れ子構造のように周囲へと波及していく点に特徴がある。それは「鏡の影」と祝した中将の君が、紫の上の新枕以前から源氏の召人であったことからも窺えよう。既に新全集が頭注で指摘している通り、中将の君の発言には、鏡を見て寵愛を得られぬ自らを知る、といった源氏に顧みられない現状への恨みが滲んでいた。「生ける仏の御国」の住人として寿福される源氏と紫の上を前に、傍らに捨て置かれた召人の残酷な生を読み取らねばなるまい。この直後に、同じ邸に住みながら身分を理由に別離を余儀なくされた、明石の君母娘の贈答歌が語られている点を踏まえても、浄土に見立てられた六条院が、むしろその比類なき輝きによって陰影を増していく様子が明らかとなるのである。

五、『源氏物語』における極楽浄土の見立て表現

最後に、今少し詳しく『源氏物語』における浄土の見立て表現を見ておこう。『源氏物語』以前の作品では、六例中五例は「浄土」という表現を用いていたが、『源氏物語』では「極楽」が四例（⑦⑧⑪⑭）、「浄土」が一例（⑨）、その他（⑩仏の御国、⑫仏のおはすなる所、⑬仏の国）が三例見える。『源氏物語』で興味深いのは、このように眼前に立ち現れた極楽浄土の形象が、しばしば登場人物が置かれた光と影を際立たせ、現世の苦を突き付ける役割を担っていることだ。参考までに、以下に全用例を引いておく。

⑦法華八講結願の日、藤壺が出家する場面

十二月十余日ばかり、中宮の御八講なり。（中略）仏の御飾り、花机の覆ひなどまで、まことの極楽思ひやらる。（賢木巻／一二九～一三〇頁）

⑧源氏が出家した藤壺の御前に参上する場面

御簾の内のけはひ、そこら集ひさぶらふ人の衣の音なひ、しめやかにふるまひなして、うち身じろきつつ、悲しげさの慰めがたげに漏り聞こゆる気色、ことわりにいみじと聞きたまふ。風はげしう吹きふぶきて、御簾の内の匂ひ、いともの深き黒方にしみて、名香の煙もほのかなり。大将の御匂ひさへ薫りあひ、めでたく、極楽思ひやらるる夜のさまなり。（賢木巻／一三二頁）

⑨末摘花の兄禅師が、源氏の邸で催された故院追善のための八講に召され、その荘厳華麗な様子を末摘花に語る場面

「しかじか。権大納言殿の御八講に参りてはべりつるなり。いとかしこう、生ける浄土の飾りに劣らずいかめしうおもしろきことどもの限りをなむしたまひつる。仏、菩薩の変化の身にこそものしたまふめれ。（後略）」（蓬生巻／三三七頁）

⑩初音巻冒頭に語られる、六条院春の町の様子

春の殿の御前、とりわきて、梅の香も御簾の内の匂ひに吹き紛ひて、生ける仏の御国とおぼゆ。（初音巻／一四三頁）

⑪源氏四十賀に際し、紫の上が薬師仏供養をする場面

仏、経箱、帙簀のととのへ、まことの極楽思ひやらる。最勝王経、金剛般若、寿命経など、いとゆたけき御祈りなり。（若菜上巻／九三頁）

⑫紫の上が法華経千部供養を二条院で催した場面

三月の十日なれば、花盛りにて、空のけしきなどもうららかにものおもしろく、仏のおはすなる所のありさま遠からず思ひやられて、ことなる深き心もなき人さへ罪を失ひつべし。（中略）まして、このころとなりては、何ごとにつけても心細くのみ思し知る。（御法巻／四九六～四九七頁）

⑬薫が六条院の賭弓の還饗に招かれた場面

物の音をかしきほどに吹きたて遊びて入りたまふを、げにここをおきて、いかならむ仏の国にかは、かやうのをりふしの心やり所を求めむと見えたり。（匂兵部卿巻／三四頁）

⑭阿闍梨が八の宮の生活を薫らに報告する際、八の宮の娘たち（大君・中の君）が弾く琴の音に言及する場面

「げに、はた、この姫君たちの琴弾き合はせて遊びたまへる、川波に競ひて聞こえはべるは、いとおもしろく、極楽思ひやられはべるや」と古代にめづれば、（後略）（橋姫巻／一二九頁）

まず目を向けたいのが、賢木巻に描かれた藤壺出家の場面（⑦⑧）である。不義密通の罪を犯した藤壺と源氏の恋の帰結を語る、物語上で最も重要な場面の一つだ。出家の決意を胸に秘めた藤壺が整えた経巻や仏具の素晴らしさは、参会者たちに「まことの極楽」を思わせるものであった。この極楽の如き空間の中で、藤壺は出家を宣言する。桐壺院の一周忌と、それに続く法華八講の余韻も冷めやらぬなか、突如果たされた藤壺の落飾に人々の動揺は激しく、⑧では悲嘆に暮れる女房らの慰め難い様子が綴られている。

興味深いのは、賢木巻（⑧）と初音巻（⑩）が、いずれも「御簾」の内から漂う薫香を契機として極楽浄土を想起している点だ。初音巻では、春の町に植えられた梅の香と、御簾の内の薫香が混ざり合って生じた得も言われぬ香りが、「生ける仏の御国」を彷彿とさせていた。これに対し賢木巻では、藤壺の御簾の内から漂う黒方の香と、仏に捧げる名香の煙に、光源氏の香が混ざり合い、「めでたく、極楽思ひやらるる」空間を現じている。御簾の内と外の香りが混ざり合い現出した「極楽」が、源氏と藤壺に自己の罪の在り様を否応なく突き付ける場としても機能している点に留意したい[29]。薫香を契機として浄土の見立てが用いられているのは、『源氏物語』ではこの二つの場面のみだ。破局を宿命

付けられた恋の終焉を描く賢木巻の「極楽」と、「生ける仏の御国」と称される栄華の輝きのもと、源氏と紫の上の変わらぬ紐帯が強調される初音巻は、意図的に対置されたかのように明暗を分けている。しかし一陣の風によって現出した浄土は、一瞬の後には再び御簾によって隔たれ消え失せる、刹那的な情景に他ならなかった[30]。

初音巻が浄土を呼び込むことで陰影を増し、人の生の苦しみに目を向けたように、賢木巻もまた、自身が犯した不義密通の罪に苛まれ落飾せざるを得なかった藤壺の、救われ難い宿世を逆説的に象徴付けている。そして出家を果たした藤壺に、死後の救済が与えられることはついに無かった。

宮の御事を思ひつつ大殿籠れるに、夢ともなくほのかに見たてまつるを、いみじく恨みたまへる御気色にて、「漏らさじとのたまひしかど、うき名の隠れなかりければ、恥づかしう。苦しき目を見るにつけても、つらくなむ」とのたまふ。（朝顔巻／四九四頁～四九五頁）

一時であれ浄土が現出した空間に藤壺がその身を置いていたからこそ、朝顔巻で亡き藤壺が源氏の夢枕に立った時、彼女が辿った残酷な運命と、二人が犯した逃れがたい罪の重さが、改めて眼前に突き付けられるのである。

もっとも、『源氏物語』に記された浄土の見立て表現の全てが、その内側に人の生の苦しみを抱えているわけではない。しかし不変の理想郷である浄土を引き合いに出すことで、変転する人の運命に目を向けるという特質が『源氏物語』には顕著だ。それは⑨の蓬生巻で、兄禅師の口を借りて「生ける浄土の飾りに劣らず」と、源氏主催の追善法華八講の盛儀を称賛する一方、源氏から忘れ去られた末摘花の絶望と孤独に語り手が筆を割いている点からも窺えよう。

さても、かばかりつたなき身のありさまを、あはれにおぼつかなくて過ごしたまふは、心憂の仏、菩薩や、とつらうおぼゆるを、げに限りなめりとやうやう思ひなりたまふに（後略）（蓬生巻／三三七～三三八頁）

源氏の帰京を知った末摘花の心に去来したのは、窮乏する己を顧みない源氏への恨みと、関係の終焉を思う寂寥感を帯びた覚悟であった。追善法華八講の様子を浄土に見立て、主催者である源氏を仏菩薩に擬えることにより、救い取られぬ末摘花の苦しみが露呈している。

思えば⑫の御法巻でも、「仏のおはすなる所のありさま遠からず思ひやられて」と、法華経千部供養の盛儀を描く傍ら、物語は残り少ない自らの命に思いを馳せる紫の上の孤愁に目を向けていた。大君・中の君の琴の音に対して「極楽思ひやられはべる」と評した⑭の橋姫巻の例もまた、出家入道を望みながらも、姫君たちの存在が絆となり果たせなかった、八の宮の俗聖としての生き方を照らし返している。「極楽浄土」への憧憬を逆手に取ることで、物語は憂世に生きる人間の苦患を問い直しているのである。

こうして見ると、「生ける仏の御国」と称される六条院が、四方に四季の景を配した、四方四季の館として語られていることは極めて示唆的だ。先例としては、前述した①の『宇津保物語』の吹上宮が知られているが[31]、四方四季を論じる際に重視されている陰陽五行説（陰陽五行思想）[32]は、早くから仏教にも取り込まれていた[33]。梁の僧宝亮の撰

とされる『大般涅槃経集解』巻十二では、須弥山の四方に配された四大洲[34]の中でも、北方の鬱単越が勝っている理由について、四方に四季が配され、季節の推移に従って自然が循環する「功」が集まっていることを挙げている。

四天下中。欝單越勝也。此方春東夏南。秋西冬北。萬物春生夏長。秋實冬藏。衆功畢也。（三七巻／四三二頁中段）

鬱単越は人間の住む四大洲の中で最も天に近い土地であり、そこに住む者の寿命は千歳を越え、天の如き快楽を得られるとされた[35]。『文陀竭王経』には、鬱単越には貧富の差が無く、住人は皆平等で衣食に困らない生活を送っていると記されている。

王聞北方有欝單曰天下大樂人民熾盛。王意欲往到其國。其國中無貧窮。無豪羸強弱。無有奴婢尊卑。皆同一等。令我人衆官屬共食之自然粳米。自然衣被服飾諸珍寶。（一巻／八二四頁中段～下段）

四方四季は、このような仏教における理想世界を彷彿させる要素でもあったのである。しかし光源氏の栄華を象徴する六条院は、鬱単越と同じく四方四季の構造を持ちながらも、誰もが平等で安寧を得る理想境とはなり得なかった。光に満ちた「生ける仏の御国」にも影の部分があること、即ち、女君たちのこの世に生きる苦患が厳然として存在していることを、「極楽浄土」の見立て表現を通して物語は浮かび上がらせている。

ここまで、『源氏物語』における極楽浄土の見立て表現に着目してきたが、「極楽」がこの上ない光に満ちた世界であるからこそ、極楽に見立てられた現世の苦の世界が、より陰影を増して反照するという構図が『源氏物語』には見える。これらは極楽浄土を美の表象として享楽的に捉えた表現ではなく、むしろ憂世からの救済を希求し浄土を憧憬する、人の身ゆえの切実な思いを孕んだ叙述と考えられる。『源氏物語』は眼前に現出した浄土を描写することで、救われ難い人間の苦しみをも照らし返す、透徹した浄土観を示しているのである。

六、おわりに

以上、『源氏物語』を中心に、極楽浄土の見立て表現の内実について論じた。当時、極楽浄土の荘厳美の世界に人々は強く惹きつけられ、信仰へと誘われた。しかし『源氏物語』では、束の間現出した浄土の光景が立ち消えると同時に、登場人物が抱く懊悩や罪が陰影を増して浮かび上がるという特徴がある。賢木巻の藤壺出家の場面からも明らかなように、極楽浄土の見立て表現を通じ、救われがたい人の身の儚さが照らし出されているのだ。奇しくもそれは、末法の世を前に救済の不安に慄き、浄土の美を現出した空間に祈りを込めた、平安期の浄土願生者たちの葛藤とも響き合う。『源氏物語』以前の作品が、過去の苦難を乗り越えた現在の栄達や幸福、あるいは比類なき主家の栄華といった、「明」の部分を強調するために浄土の見立てを用いていたのに対し、極楽が照らし出す「暗」の部分に目を向けた『源氏物語』の浄土観は、その切実さにおいて明らかに深化しているのである。

＊本文の引用は、『日本書紀』『宇津保物語』『落窪物語』『枕草子』『源氏物語』『古今和歌集』は新編日本古典文学全集（小学館）、『後拾遺和歌集』は新日本

古典文学大系（岩波書店）、『風雅和歌集』『長秋詠藻』は国歌大観、『小右記』は大日本古記録、『百錬抄』は新訂増補国史大系（吉川弘文館）、『無量寿経』『阿弥陀経通賛疏』『大般涅槃経集解』『文陀竭王経』は大正新脩大蔵経（大正新脩大蔵経テキストデータベース参照）に拠った。

注

1 往生を希求する者には上中下の三つの機根（能力・資質）の別があり、それぞれの方法に則って修行をすることで、極楽往生が果たされるという教え。

2 片根満保氏は、女君の存在に焦点を当て最大限の賛辞を贈ることで、六条院の主である源氏を称賛するという叙述の方法に着目し、初音巻冒頭の記述は、「世俗を超越した源氏の栄華の内実」を、「特に女君達との関わりにおいて語っていこう」とする物語の姿勢を表したものであると解している。（片根満保「六条院の女君達――初音巻・胡蝶巻を中心に――」／『国語と国文学』第七六巻六号／一九九九年六月）

3 高木宗監『源氏物語における仏教故事の研究』（桜楓社／一九八〇年）、同『源氏物語と仏教』（桜楓社／一九九一年）

4 西田禎元『日本文学と『法華経』』（論創社／二〇〇〇年）

5 岩瀬法雲『源氏物語と仏教思想』第一章（笠間書院／一九七二年）、田村圓澄「『源氏物語』と浄土教」（『日本佛教史二』奈良・平安時代／法藏館／一九八三年）、間中富士子「源氏物語に現れた天台仏教」（『新国学の視点』／国学院大学院友学術振興会編／桜楓社／一九九三年）

6 三角洋一「『源氏物語』に見る女性と仏教」（『国文学解釈と鑑賞』第六九巻八号／至文堂／二〇〇四年八月）

7 重松信弘『源氏物語の仏教思想――仏教思想とその文芸的意義の研究――』（平楽寺書店／一九六七年）

8 慧慈は聖徳太子の仏教の師として推古天皇三年（五九五）に来朝し、以降国政や外交の助言者として、聖徳太子と深い交誼を結んでいた。

9 参考までに述べておくと、『伊予国風土記』の「湯の郡、伊社迩波」の条に残された碑文には、現世の浄土たる理想郷「寿国」の思想が見える。これは推古天皇四年（五九六）十月に、慧慈と聖徳太子が湯岡温泉を旅した折の事跡を記したものだ。金任仲氏によれば、ここに言う「寿国」には極楽浄土が重ね合わされており、理想的な統治下で、この世を浄土にせんと願う為政者の冀望が込められているという。（金任仲「高句麗僧慧慈と聖徳太子：「伊予湯岡碑文」を中心に」／『文芸研究：明治大学文学部紀要』第一三九号／二〇一九年）

10 六往生伝とは、平安中期から末期にかけて撰述された『日本往生極楽記』（慶滋保胤）・『続本朝往生伝』（大江匡房）・『拾遺往生伝』（三善為康）・『後拾遺往生伝』（三善為康）・『三外往生記』（釈蓮禅）・『本朝新修往生伝』（藤原宗友）の六種の往生伝を指す。

11 古代社会において、「夢」は神仏や霊魂との交流をもたらす場でもあった。この点については、西郷信綱氏（『古代人と夢』／平凡社／一九七二年）や、上野勝之氏（『夢とモノノケの精神史：平安貴族の信仰世界』／京都大学学術出版会／二〇一三年）の研究に詳しい。

12 源信や慶滋保胤が中核を担った念仏結社である二十五三昧会では、往生者と結縁衆の間で誓いが交わされ、往生の成否によって引接結縁や滅罪供養する義務が課されていた。『二十五三昧式』には、先に往生を果たした者が現世の結縁者に往生の可否を知らせるという誓いが見える。

13 往生のための行業については、『観無量寿経』の十六観からなる観法のうち、九段階の往生について説いた第十四～十六観の後三観（九品段）に詳しい。また二十五三昧会では、「一。可三毎月十五日勤二修念佛三昧一事右今日是彌陀垂二感應一。閻王記二善悪一之齊也。結衆殊慎二三業一。堅護二衆戒一不レ生二放逸之行一。勿レ従二世路之事一」（「横川首楞嚴院二十五三昧起請」／『大正新脩大蔵経』八四巻／八七八頁中段）と、戒律を守って念仏を唱えることが、往生を遂げるために必要な姿勢であるとしていた。ただし往生伝では、各伝ともに平時の行業よりも臨終時のあり方に着目しており、特に生者に示された奇瑞・夢告に重点が置かれていることが西口順子

氏により指摘されている。（西口順子「浄土願生者の苦悩――往生伝における奇瑞と夢告――」／『平安時代の寺院と民衆』／法藏館／二〇〇四年）

14 臨終に際し、「聖衆来迎」を求めて行う念仏の作法のことを言う。源信は『往生要集』巻中・大文第六「別時念仏」において、臨終行儀の項を設け、浄土教における臨終行儀の次第と、臨終に際して正念を得るための注意点について説いている。

15 同様の話が、『大鏡』や『今昔物語集』にも収められている。

16 注13西口氏前掲論文。

17 注11上野氏前掲書。

18 松岡智之「浄土――浄土三部経」（『国文学：解釈と鑑賞』第七一巻五号／二〇〇六年五月）

19 この点については、釈教歌の研究を中心に同様の指摘が為されている。釈教歌の詠みぶりの変化に着目した平野多恵氏は、仏典の表現が伝統的な和歌表現に置き換えられていった点について、「和歌的な現実世界の中に仏の超越世界を見ることでもあり、日本の仏教が行き着いた終着点の一つ」であると評している。（平野多恵「釈教歌の方法と文体」／『日本文学』第六三巻七号／二〇一四年七月）

20 参考までに述べておくと、『阿弥陀経』には「金銀琉璃頗梨車渠赤珠馬瑙」（『大正新脩大蔵経』十二巻／三四七頁上段）、『無量寿経』には、「金銀琉璃珊瑚琥珀車渠瑪瑙」（『大正新脩大蔵経』十二巻／二七〇頁上段）、『法華経』「見宝塔品」には、「金銀琉璃車渠馬脳眞珠玫瑰」（『大正新脩大蔵経』九巻／三二頁中段）と、七宝の名が挙げられている。

21 七宝によって荘厳され、三重の垣を巡らせて四方には園林が広がる吹上宮の構造については、『往生要集』大文第二「欣求浄土」の記述の他、阿含経典に見える、逍遥する者に娯楽・快楽を与えるという四方園林からの影響が指摘されている。（張可勝「『うつほ物語』の四方四季」／『北海道大学大学院文学院研究論集』第一九号／二〇一九年一二月）

22 四方四季の館については、竜宮の如き異界性を指摘した室城秀之氏の論（「『うつほ物語』の空間――吹上の時空をめぐって――」／『うつほ物語の表現と論理』中古文学研究叢書二／若草書房／一九九六年）や、竜宮城や浄土のような理想境の表現として、神仙世界に通じる理想性が託されていると述べた三谷栄一氏の論（『物語史の研究』第三編第三章／有精堂出版／一九六七年）に詳しい。

23 秋山虔「源氏物語「初音」巻を読む――六条院の一断面図――」（『平安時代の歴史と文学』文学篇／山中裕編／吉川弘文館／一九八一年）、増田繁夫「春秋の争い――玉鬘・初音・胡蝶」（『国文学：解釈と教材の研究』第三二巻一三号／學燈社／一九八七年十一月）、原田敦子「栄華 その光と影――源氏物語初音・胡蝶巻と紫式部日記――」（『国文学攷』第一一八号／一九八八年六月）

24 初音巻では、「山吹にもてはやしたまへる御容貌など、いとはなやかに、ここぞ曇れると見ゆるところなく、隈なくにほひきらきらしく、見まほしきさまぞしたまへる」（初音巻／一四八頁）と、源氏を惹きつける玉鬘の美貌が語られている。上原作和氏は、胡蝶巻の季御読経において、玉鬘を表象する「山吹」が登場したことで、物語が「幻想の異空間から、現実的な色好みの空間へと変容」させられていくと指摘する。（上原作和「恍惚の光源氏――「胡蝶の舞」の陶酔と覚醒」／『系図をよむ／地図をよむ――物語時空論』叢書想像する平安文学第七巻／勉誠出版／二〇〇一年）

25 和辻哲郎「日本の文芸と仏教思想」（『和辻哲郎全集』第四巻／岩波書店／一九六二年）

26 注25和辻氏前掲書。和辻氏は法会の美的観想の世界を指して「陶酔」と表現し、労働から乖離した安逸な貴族生活においてのみ成し得る美の感得のあり方だとした。

27 倉田実「男と女が見入る鏡の影：平安貴族の調度に託す情愛表現」（『大妻女子大学紀要・文系』第四五号／二〇一三年三月および『王朝の恋と別れ：言葉と物の情愛表現』／森話社／二〇一四年一一月所収）

28 「かねてぞ見ゆる」とは、正月行事である歯固の祝歌「近江のや鏡の山を立てたればかねてぞ見ゆる君が千歳は」（『古今和歌集』巻二十／神遊びの歌／一〇八六番歌／大友黒主）を引いた表現で、新年にふさわしい祝意が

添えられている。

29 中井和子氏は、物語が「極楽思ひやらるる夜のさま」と記したのは、二人の思いを仏が感得したとでも言うような叙述であり、逆説的に、こういう形でなければ、源氏と藤壺が一つになることはできなかったことを意味すると述べている。（中井和子『源氏物語と仏教』第一章／東方出版／一九九八年）

30 木澤景氏は賢木巻の当該場面について、「この世の「自然」が「極楽」を現出させる契機として働くと同時に無常なるもの」として描かれていると述べ、「無常であるこの世において、それでも「極楽」を垣間見ようとする衆生の苦しみ」を指摘している。（木澤景「極楽浄土のあらわれ――『源氏物語』と日本仏教における浄土の思想――」／『季刊日本思想史』第八〇号／ぺりかん社／二〇一二年）

31 吹上宮については、『源氏物語』の六条院構想へ与えた影響が古来より指摘されてきた。『河海抄』は、「うつほの物語云紀伊国むろの郡に神なひのたね松といふ長者吹上浜のわたりに（中略）四面八町のうちに四季をわけてすまひけりといへる相似たり」と、六条院の準拠として『宇津保物語』の吹上宮を指摘している。

32 古代中国で生じた「道」の思想。陰陽とは、陽が極まると陰に転じるように、この世は相反する二つのものが一つとなり、常に変化し続けていることを言う。また五行は、この世のあらゆる事物や事象は水木火土金の五つの元素からなっており、これらが互いに影響し合って循環することを表している。

33 例えば天台智顗の『摩訶止観』巻八「観病患境」では、陰陽五行説に基づく身体観が説かれている。

34 須弥山の四方を囲む四つの島を言う。いずれも人間が住む土地で、北方の鬱単越、東方の弗婆堤、西方の瞿陀尼、南方の閻浮堤に分かれている。同じ人間界でありながら、天に近い高所にある北方の鬱単越の住人の寿命が千歳であるのに対して、低所にある南方の閻浮堤の住人の寿命は百歳であるなど、四大洲の中にも位があるとされた。

35 唐代の僧慧琳がまとめた音義書である『一切経音義』巻二十五には、「鬱單越國亦名北倶盧洲此云高上地四方正等人面如之定壽千歳如天快樂佛法不聞名爲難處」（『大正新脩大蔵経』五四巻／四六五頁中段）と記されている。